「中日青少年友好交流活動」認定事業

「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～ 第４回優秀賞作品

「日本の教育から展開を」

北京市　孫黙

ある国を見ようという時、私は教師なので、最初に見るのは教育制度である。今年の３月 11 日、日本で世間を震撼させたマグニチュード 9.0 もの強震が発生し、列島に計り知れない損失をもたらした。しかし、地震後の日本人の振舞いは平静で秩序があり、深い悲しみの中にあるというのに、互いに助け合う態度は、私のような外国人にはむしろ不可思議にさえ思えた。被災後の写真には、落ち着いて普段通りに整然としている様子を捉えたものが何枚もあり、何事にも屈せず困窮から立ち上がることができる民族の力が現れているが、これはまさに現代教育が探求する命題である。

教育の根本は人間性の涵養である。日本の教育制度は中国と同じ６、３、３、４制であるが、そのうち前の二つは義務教育の段階である。日本の義務教育は、早くも 1920 年から 99%にも達していた。そのうち 6～12 歳の小学校教育は特に賞賛に値する。児童は人生の啓蒙段階であり、特に道徳、観念、能力の培養に気をつけるべき時期である。私達は通常、子供のうちに善悪の判断を学び、読み書きを覚える。物事に対する最初の印象は、初恋と同様、成人後の志向を決めてしまうことが多い。

高校生の時に読んだ黒柳徹子の『窓際のトットちゃん』は、言葉が明快で暖かみがあると深く感じた覚えがある。分かりやすい叙述の中には、クラスのある問題児に対する教師の深い愛情を見て取ることができる。愛は、人類にとって、最も基本的な技能である。本の中の校長は、家庭の貧しさに苦しんでいる生徒の一人一人に支援の手を差しのべている。学校に余裕がなくとも、生徒達には工夫溢れる「山の幸、海の幸」を味わわせたのだ。そうして積み重ねられた愛は、彼らが成人すると流れ出すようになったのである。

ただ、日本人も受験志向の教育による弊害を受けたことがある。教育に対していくつか偏狭なところがあったのである。彼らは全ての学生に知識を学ぶ能力があると考え、学生の努力、継続力、自律能力、学術面での能力が学業成績を決めるものとみなしていた。これらの学習や行動習慣は統一的な授業と訓練によって身につくものである。従って、義務教育では彼らの能力に合わせた授業を行っておらず、生徒の個人差に適応したものではない。このため、日本は近年来 50 年間でノーベル賞受賞者を 30 名輩出すると豪語した後、教育制度上の弊害改革に力を注ぎ、教育に科学研究を大規模に導入して特定実験基金を設立し、政府が特殊な学生の“考え”に青信号を灯した。最初の 10 年で３名のノーベル賞受賞者が出て、世間を賑わわせたものである。

なぜ日本人は“言ったことは、必ず実行する”のか？その答えは集団意識に関する生涯教育にある。日本の学校には用務員がおらず、清掃や給仕など普段の校内で必要な作業については、全て各クラスの生徒が協力して行っている。教育関係者であるひとりの友人が日本で研修を受けてきた後、私に過激な感慨を語ったことがある。「日本の子供は本当に手に負えないよ！」きっかけは、彼らが小学校を参観し、児童達と給食を摂ったことだった。配膳は衛生服を身につけた日本の小学生が行い、一同は並んで順番待ちをした。食べ終わると、彼らはまた片付けを待っていた。その間、友人は料理を食べ終わっておらず、未開封の牛乳を片付け中のお盆に載せたところ、小学生が傍にやってきて、料理も牛乳も“きれいに空にする”よう懇願し、その後、ようやく食器を回収したという。しかも、彼らは牛乳パックを潰して専用のトレイに入れ、さらに別の児童が食堂へ運び回収に出していたのである。日本の小学校教育において、“食事”を完結させるということは完全に一連の行動であり、一同が協力して連携し合し、各プロセスが順調に引き継がれていくことで、やっと腹を満たすことができるのである。

この話には驚嘆を禁じえず、日本の集団への協力意識と責任感に関する教育は、本当にきめ細かなものであると感じた。それ以外にも、多くの学校では学年に関わらず“二人三脚”など協力する能力を試す競技を設け、児童達が多くの面で一致団結を忘れないよう促すことに努めていた。だからこそ、地震などの災害が発生した時、心を一つにできるのだ。それは単なる物理的な助け合いではなく、精神レベルで早くから存在している信念ー私達と国は一緒だーなのである。心に団結力がなければ、地域の限界を超えて協力し、限りない可能性を創造することはできない。

東日本大震災後に日本人が世界に示した態度は客観的で明確なものだった。私達は災害に屈せず、一時的な資源不足を恐れもしない。涙を流すよりも、国と仲間が自分の手を引いてくれること、そして共に郷里を再建することを信じたほうがよい。これは早くから日本の教育理念に埋め込まれ、代々伝承され教え継がれてきたものである。中国の現代教育はこれを参考に、キャンパスの“1990 年以後現象”や“サブカルチャー”への対策をすべきであり、一人一人の教育従事者が深く再考するに値するものである。